

千葉市のいちごの歴史に新たな1ページを

～いちご新規参入者への栽培技術習得・経営安定化支援～

1 活動のねらい

千葉市では毎年1～2経営体が観光いちご経営を開始しており、その多くは新規参入者です。意欲ある新規参入者が農業の担い手として定着し、彼らならではの新しい感性を地域活性化に生かすため、栽培技術の習得や経営の安定化による個々の経営ビジョン実現に向けた支援と地域の農業者とのつながりを促進する普及活動を行いました。

2 課題の背景

観光いちご経営を目指す新規参入者の多くが千葉市で経営を開始する背景には、①いちごが千葉市の生産振興品目になっていること、②近くに消費者がいるため観光いちご園などの都市型農業を展開しやすいこと、③千葉市が新規就農希望者の研修機関となっていること、があげられます。

一方で、観光いちご経営を始めるには多額の初期投資が必要であり、それに見合う農業所得を得るためには早期に栽培技術を習得することに合わせ、経営管理能力も問われます。また、新型コロナウイルス感染症の影響で観光いちご経営では集客が困難となっており、販路の確保も課題となっています。

さらに新規参入者は経営開始後、自己の経営確立に集中しなければならず、地域の農業者との交流の機会が持てずに地域で孤立するケースも見られます。

3 普及活動の経過・結果

(1) 集合研修を通じた栽培技術の習得支援

千葉県青年農業者育成体系では、農業経営体育成セミナー（以下、セミナー）修了後に青年農業者等スキルアップ研修（以下、スキルアップ研修）へ移行することになっていますが、新規参入者は就農と同時に経営主となる



写真1 スキルアップ研修で
新規参入者のハウスを視察

ことから、いちごに特化した栽培技術習得も必要となるため、セミナーとスキルアップ研修を同時並行で受講できるよう開催時期や内容を調整して参加を呼びかけ、4名の新規参入者が同時受講しました。

セミナーでは、農業の基礎知識を広く身につけることと、同時期に就農した青年農業者との仲間作りを進めました。

スキルアップ研修では、いちごの栽培管理技術のほか、新規参入者の関心が高い販路開拓、環境制御、GAPについても取り上げました。販路開拓については、いちごを経営

の基幹品目とする農業士を講師に招き、先輩いちご生産者との交流の機会を設けました。また、新規参入者は前職で身につけたスキルを農業に生かすこともできるため、講義の一部は新規参入者が講師を務める試みも行いました。

これらの集合研修の結果、新規参入者のうち統合環境制御を実践している2法人と環境モニタリング装置を導入予定の1名による、環境制御技術の自主的な勉強会を立ち上げる動きが生まれました。また、新規参入2法人が国際水準 GAP の認証取得を目指す意向を持ち始めました。

(2) 個別巡回を通じた栽培技術及び経営課題解決支援

集合研修ではカバーしきれなかった新規参入者個々の課題やニーズに応じた栽培技術支援は、関係機関と連携して個別巡回で行いました。効率的、効果的な農薬散布のコツなど実践的な技術習得については、指導農業士の協力を得て、新規参入者が篤農家から継続的な支援を受けられる体制と指導農業士を通じて地域とつながるきっかけを作りました。

新型コロナウイルス感染症に関する経営支援は、経営継続補助金を始めとする各種支援策の活用を個々の経営の状況に合わせて提案しました。また、経営開始、規模拡大、運転資金の調達に活用できる融資制度を紹介し、コロナ禍を考慮した経営改善計画書の作成支援を行いました。これらの支援にあたっては、新規参入者と対話を重ね、自らの言葉で計画書を作成するよう誘導し、経営ビジョン実現のプロセスを明確にすることを目標としました。



写真2 新規参入者が初めて収穫したいちご

4 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中、コロナ禍での観光いちご経営のあり方を考える必要があります。その鍵の1つとなり得るのが新規参入者の経営に最新技術を積極的に取り入れ、前職で培った経験や人脈を生かし、柔軟な発想で展開される新しい経営スタイルです。彼らの活躍が昭和30年代に始まった千葉市のいちご生産の歴史や風土と融合し、令和の地域活性化に結びつくよう個々の経営確立支援と地域への定着支援を継続していきます。

5 担当者 千葉・習志野グループ ◎久保田 祥子、 木村 明花音

6 協力機関

千葉市、JA千葉みらい、JA全農ちば、千葉県農林総合研究センター